

教育について考える - 対話と出会いから -

花岡 永子
Hanaoka Eiko

はじめに

2011年3月17日に、奈良産業大学情報学部の教育学専門の吉村文男教授の退職記念講演会が開催された。この講演会に、吉村教授のご退職の講演の他に、心理学や教育学がご専門の本学名誉教授のM.教授と宗教哲学や組織神学が専門の私が同講演会の講演にお招き頂いた。情報学部の学部長や本講演会のご担当の係の先生方のご配慮もあって、教育学の専門の講演ではなく、私がこれ迄どのような教育を受けてきたか、そして私の理想とする教育について講演するよりのことであった。そういうことであればできるのではないかと思い、講演をお引き受けした。その上、数年前の本学の改組の折に、本学でも教育学の高校教員の資格の免許証がとれるようになり、その時に、吉村教授にお願いして、他大学から本学へご転任頂いた。更に、京大の教育学部で曾て教授であられたU.教授の研究会で吉村教授とは一時期共に学んだこともあり、お元気でご退職になられることに、私もお祝い申しあげたい希望もあった。それで、講演をお引き受けした次第であった。

この記念の論考においても、今年3月17日の講演を中心に考察することの了解を頂いているので、講演内容に従って、教育についての考察を進めて行きたい。ここで、先ず述べておきたいことは、この論考の基礎には、次のようなカントの考えが存することである。

カントは「人間は教育を通じてのみ人間となる」⁽¹⁾と語り、更に、教育とは次の四事柄を核心としていると考えている。①訓練されねばならない。②教養(=文化)を身につけねばならない。③文明化されなければならない。④道徳化されなければならない⁽²⁾、という4項目を。そして、これらのカントの教育についての考え方と、カント的な永遠平和⁽³⁾への願いとが。

I. 大学以前の教育による諸前提

小学校に入学する迄の教育では、家庭での家族による教育が大切と考えられる。最近では、両親が共働きのため、保育園や幼稚園に幼い時から通う子供たちも増えてきている。しかし、それにしても、父母等の家族による教育が最も大切であろう。家庭での教育は、自由と訓練の両者からなる教育が必要であろう。

次いで、小学校時代の教育では、家庭においても学校においても、何よりも先ず夢の育成と、自然や友人との交わりへの誘いが必要である。その後の中学校時代の教育は、人間における自己と他者との、また人間と自然との交わりにおける人格性や倫理性へ向けての厳しい指導が大切である。義務教育を終えた、次の高等学校時代においては、周知の、フランス革命のモットーでもあった自由・平等・博愛や、人格や学問の総合性の育成が必要である。第二次世界大戦後は、日本の教育からは、経済の発展のみに努力した結果、人格性の育成や文学、哲学、倫理、宗

教等の精神性の文化が、弱体化して今や消滅する寸前の危機にある。現代の世界的現象でもある、人間の人格性や精神性の弱体化や、義務感を伴っている責任感や対話による国家間の和や調和の欠如は、日本においても、世界への経済進出を急ぎ過ぎた余り、昔ながらの伝統も捨て去られて、特に著しくなっている。

以上のことを鑑みても、大学以前の教育においては、心身一如^{しんしん}で、また仏教が強調する身心一如^{しんじん}の教育が先ず要請される。この点においては、遠足、運動会、マラソン大会、学芸会、文化祭等々は、盛会になされるべきである。第2に、開かれた対話への誘いが必要である。また、環境保全のために、動物の飼育や植物の生育の観察、あるいは核実験の廃止や核兵器の放棄への教育が、今年3月11日の地震や津波による福島第1原発事故以後は、特に必要である。さもないと、将来世代は大変な放射性汚物からの被害をうけることになる。第3に、弁論大会や討論会を開催して、自らの意見や主張の発表や討論の能力が育成されるべきであろう。さもないと、個や団体の意見の相互の対立や国際的な会合の場での意見交換が単に敵対的な大変貧しいものになってしまうであろう。高校時代迄に、学問や社会生活において、総合性、学際性、国際性の訓練が与えられていないと、大学教育だけでは不十分なままで社会に出て行くことになってしまう。第4に、大学以前の教育においては、責任感の育成が大切である。そのためには、クラブ活動、ボランティア活動、ホーム・ステイの外国留学等が考えられる。

20世紀は、M. ブーバー (Martin Buber, 1878-1965)⁽⁴⁾ の「対話の倫理」や H. ヨーナス (Hans Jonas, 1903-1993)⁽⁵⁾ の「責任の倫理」が強調されたが、対話や責任は、20世紀に限らず、人間の一生涯の教育において何時の時代にも必要な事柄である。

II. 大学時代の教育

大学時代には、先ず各人の「自己」が、学問的にも人格的にも、生涯を通じての課題であることの自覚が呼び醒まされなければならない。カントは、本稿の冒頭に上げたように、教養とは文化でもあると理解しているが、本稿の著者の私においては、これはもう少し詳しく理解されている。即ち、教養とは「自己」や「他己」が生涯に亘っての課題と自覚することと理解されている。つまり、「自己」は生涯に亘って「真の自己」を目指して「自己」になって行かなければならないと同時に、常に「自己」はすべての「他者」の「自己」、即ち「他己」とも根底的には「我と汝」という二人称的な関係で生きて行かなければならない課題的な関係存在であると、各人の一生涯にわたって自覚されることが教養であると。また、大学時代には、各人には各様の生得的な能力が与えられてもいるので、それが引き出されることに助力することも教職者の役目ともなるであろう。

第2に、大学時代には、全人格的な教育が必要である。そのためには、例えば高校時代からのボランティア活動も引き続き必要であろうし、教育実習や外国の大学生との交換留学等も必要である。更に、フランスの哲学者の J. デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004)⁽⁶⁾ は十数年前にフランスでの講演で、これ迄の西欧の形而上学としての伝統的な哲学を脱構築しようとしたが、心を開いた対話としての「正義」、そして「許し」、「歓待」、「責任」の四徳目はどうしても脱構築できなかつたと語ったと、京都フォーラムでのある会合で東大の哲学の T. 教授は語った。全人格的な教育とは、この例で言えば、第二次世界大戦の時にユダヤ人達を迫害や殺戮したことを対話による正義のうちで許しを乞いたいとドイツ人達が、ユダヤの人々の所に訪ねて来たら、ユダヤ人達はドイツ人達を歓待して、心を開いて対話に応じ、しかもドイツ人の責任はとって貰うという行動が可能となるような教育が施されることである。

第3に、大学時代には、学問における総合性・学際性・国際性が育成されなければならない。近年、日本の教育では、既に高校時代に理系と文系が分離されてきているようであり、大変嘆かわしいことに思える。というのもこ

のグローバルな時代には、文系と理系の教育が相俟って初めて各々の学問分野が深められて行くと考えられるからである。理系のみが重視されて文系が軽んぜられるような国家あるいは世界においては、偉大な人間は決して育たず、また世界平和に貢献できるような偉大な学問も決して生まれて来ないと理解されるからである。理系のみが重視され、優遇される場合には、カント的に語るならば理論理性としての悟性のみが猛進し、各国間の競争原理のみが発展し、例えばフランス革命のスローガンとなったような万人の自由、平等、博愛や世界の平和への道は閉ざされて、やがて地球そのものが早晚滅びへの道へと転がり落ちて行くことになる。

第4に、大学教育は、人間としての各人は自然の一部でもあるとの自覚へと導き、また、地球の環境保全は人間の各主体と環境との相互の影響によって成り立っているという、哲学者・西田幾多郎（1870 - 1945）が主張し、更にこれを応用した生物学者・今西錦司（1902 - 1992）におけるように、個人と環境との相互依存や相互限定によって成立することを、講演会、研究会、クラブ活動、文化祭、討論会等々、大学にふさわしいあらゆる道を模索しながら、育成する必要がある。

第5には、各学生の希望するいずれの他大学にも内地留学や外国留学ができるような組織や友好条約が望まれる。

第6には、各大学に特色ある学会の設立は、各大学独自の力強い情熱やエネルギーを学生に与え得ると考えられる。

Ⅲ．大学関係の教育

これ迄に経験した著者の人生に大きな恵みであったところの、単なる合理性を脱却し、しかも総ての学問に通底するような根本的な思索力を与え、その上世界平和に貢献するような自由な教育について、著者の記憶に強烈に残っている幾つかの例を挙げて、それらを幾つかの出来事に分けてに振り返ってみたい。

1. 京都大学哲学部の宗教哲学に在籍していた学生時代は、何と言っても大変恵まれた時代であった。師事したいと長らく願っていた宗教哲学者にして哲学者の西谷啓治先生の指導の下で勉学できたからであり、在学生の自由に任せる強制のない自由な京大の学風は、殊のほか有り難いものであった。しかも、西谷教授の強靱な思索力や講義の中に出てくる様々な喩えは、如何に生きるべきかという意味で著者の人生を大きく左右するものであった。

2. ハンブルク大学神学部組織神学科に、京大の博士課程の1回生の時に、修士時代に結婚していた今は亡き夫と共に留学したが、そこでH. ティーリケ教授（Helmut Thielicke 1908 - 1986）に8年半ほど師事できたことは、大きな恵みであった。ティーリケ教授は、第二次世界大戦時のナチスによって大学の講義、教会での説教、旅行等の公的な活動を禁止されて大変な苦勞をされながら、ヒトラーによる死を覚悟で、一ヶ月一回の説教だけは禁止されているにも拘らず続行されたという。戦後はチュービンゲン大学長ともなれ、1960年からハンブルク大学の組織神学科の教授であった。ティーリケ教授の指導の下に平和への生き方へと徹底的に導かれた。著者は小学校6年生から高校迄は原爆の投下された広島で教育を受けたので、キリスト教を根底とした自由、平等そして平和への激しいほどの願いと情熱を持って生きておられたティーリケ教授の指導は、ドイツ特有の保守性の強いキリスト教が基礎となっていたが、核兵器や戦争や死刑に反対である著者には、ティーリケ教授の思想はこの上なき贈りものであった。その上指導教授のティーリケ先生の推薦で、莫大な奨学金で研究に励み得、ヨーロッパの一番設備の良い寮という、博士論文執筆のための寮であるドクトランデン・コレクに試験をそれぞれ受けてではあったが、私ども夫妻共々入寮できたことは、苦学生であった私ども夫妻にとっては生涯で最も幸いな時期であった。

3. 1984年にスイスのエラノス会議から直接、入会の勧誘を受け、5回ほど会議に出席し、2回の講演を会議の本部から依頼されたことは、夫の癌による他界後の意気消沈して禅寺での修行に励んでいた最中の著者には、全

く別世界への誘い^{いざな}であった。修行中ではあったが、京大の学生時代からの恩師であった西谷啓治先生のご配慮で会議に出かける10日間程はお寺での修行が免除された。1933年から始まっていたエラノス会議には、キリスト教や西欧の伝統的な形而上学には満足し得ず、新しい道を求める学者や芸術家が集まって、講演と議論と質問会で新しい文化や学問の可能性が探られ、模索されていた。夫の他界後、全く新たな道を歩み始めていた著者には、大変有り難い会議であった。そこでは、誰に憚ることもなく、自らの考えを自由に語ることができ、また各講演の後には各講演者への質問の時間が常に1時間から2時間設けられていたので、自由に質問や議論ができて、正に学問の自由な研究会という雰囲気が醸し出されていた。この会議で、ノーベル化学賞を受賞したI. プリゴジン (Ilya Prigogine, 1917 - 2003) や世界の各学問の最先端に行く学者の方々と親しく語り合い、多くの議論を交わす機会が与えられた。勿論考え方はそれぞれ相違し、例えば、I. プリゴジンの化学理論は、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646 - 1716) や禅の考え方とは相違していたが、相違していることを知ることも大変な学問的な刺戟となった。日本では私以前にはこのエラノス会議へは、鈴木大拙 (1870 - 1966)、井筒俊彦 (1914 - 1993)、上田閑照 (1926 -)、河合隼雄 (1928 - 2007) の4人の諸先生が講演に招かれていた。私は日本からの5人目の講演者であったが、エラノス学会からの直接の講演への招待は日本では私が初めてのことと伺った。エラノス会議の講演者の選考会議が新しく組織し直されたためと仄聞した。いずれにしても、ここでの幾度かの会議によって、夫の他界後の意気消沈した生活から学問への再出発の第一歩が踏み出され得たのであった。エラノス会議やそこでお世話になった世界中の諸先生には、どれだけ感謝しても感謝しきれない思いである。

4. 1982年9月から花園大学の禅文化研究所が中心になり、その当時禅文化研究所理事長であった平田精耕老大師が代表者となられ、京都大学名誉教授の西谷啓治先生が顧問となられて、京都宗教哲学研究会が創設された。

1929年から1999年迄の70年間谷口工業奨励会から出発していた谷口財団は、1973年から1999年迄、日本の学者が世界の学者と学術研究上での友好関係が持てるようにと「学術研究」と「国際シンポジウム」の運営奨励資金を18の研究グループに援助された。そのうち13部門は理系であったが、4部門は文系であった。京都宗教哲学研究会がこの文系の4部門の一つとなった。私は花園大学から大阪府立大学へ転任となる迄の第10回の国際シンポジウムまで、この京都宗教哲学研究会の5人からなる委員会のメンバーとして参加した。毎年、日本人と外国人の研究者の各々の約10人の合計20人で、国際シンポジウムが京都で開催された。毎年国際シンポジウムのための研究者の選考や会計の資金繰りや、英語やドイツ語での研究発表、週に一度の研究会等々、学問やシンポジウムや会議の訓練をここでみっちり仕込まれる機会が与えられ、また日本や世界の真剣に学問に取り組む研究者の諸先生と毎年1週間ほど宿泊所付きの会議場で過ごせたことは、計り知れない恵みであった。

5. 京都フォーラムが、1989年に京都大学理学部の物理学専門の清水栄名誉教授が座長となって始められた。その頃京都の相国寺の専門道場に修行に通っていた著者は、梶谷宗忍老大師から、物理学をも学んでくると京都フォーラムのメンバーに推薦して下さった。そのため、以後は、故 清水栄先生と、老大師からご紹介頂いた同じく物理学者で数年後には残念ながら病気で他界された、国立高エネルギー研究所名誉教授の久寿米木朝雄先生とに、色々と物理学の分からないところを質問させて頂き、教えて頂くことになり、著者の足りない部分が有り難いことに少しずつ是正されることができた。また、清水栄先生も京都フォーラムの事務局長で理事長の矢崎勝彦氏も宗教には大変造詣の深い方であったので、諸宗教の対話には、京都フォーラムは格好の議論の場となった。現在でも、ゆっくりとした足取りではあるが、物理学の様々な書を読み続け得ているのも、京都フォーラムのお蔭であると感謝の念に耐えない。また、京都フォーラムの会議の途中からは、東大の天文学の名誉教授の海野和三郎先生(現在、東京自由大学学長)が講演に参加され始められ、著者は天文学のみならず、太陽エネルギーの重要性について

も現在に至るまで大いに啓発され続けており、今年の3月11日の東日本の地震・津波・原発事故に伴う太陽エネルギーの重要性が一般社会の内でも理解されるようになり、海野先生の絶えざるご努力がやっと実り始めたことは、大変有り難いことである。

6.1987年に、1988年4月における、アメリカのクレアモント大学大学院から、女性解放運動や、前年に花園大学に講演に来られていたJ.ヒック教授（John Hick,1926-）や A.N.ホワイトヘッド（Alfred North Whitehead, 1861 - 1947）⁽⁷⁾の研究所である“The Center for Process Studies”からの講演の招待を受けた。その上、1987年には同じく1988年のアメリカのシカゴでの米国宗教学会の「西田哲学仏教学派」部門での講演の依頼を、花園大学のT.教授の推薦を受けて、本部門の責任者の、その当時アメリカのクレアモントに在住されていた延原時行牧師のお招きを受けた。それまでは、著者はアメリカに行ったことはなかった。しかし、一度はアメリカに行って新しい多くのことを学ばなければならないと周りの方々から助言も受けていた。しかし、アメリカ宗教学会のテーマは「西田とA.N.ホワイトヘッド」を中心としていた。そのため、1987年はホワイトヘッドの著作類を初めて読破しなければならなかった。これは大きな冒険であった。49才で全く新たな哲学に取り組むことは、人間のいのちは明日をも知らぬ無情極まりなきものでもあるので、これは無謀であることも著者にはよく分かっていた。

ヨーロッパの伝統的な形而上学としての哲学とは全く相違したホワイトヘッドの有機体の哲学の著作集を、前期の純粹数学的な著作は後回しにしても、つまりイギリスでの数学教授の定年後にアメリカに招かれてのハーヴァード大学での哲学教授になってからの64才以後の著作を読むだけでも至難の業であった。身体が、否、心身がボロボロになって行く感じであった。

しかし、読み始めて行くうちに、ホワイトヘッドの有機体の哲学は、日本の西田幾多郎の哲学に大変類似していることが分かってきた。今振り返ってみれば、あの時勇気を出して英米系の新しい哲学に取り組んで良かったと、つくづくと思うのである。その後アメリカでの「ホワイトヘッドと西田の哲学」に関係した講演や学会発表に幾度出掛けたか分からない程であるが、今年の日本の福島第一原発事故で種々の学問領域や生活領域でパラダイム・シフトが生じざるを得ない現実を考えると、今後の世界の哲学におけるA.N.ホワイトヘッドの有機体の哲学と西田の絶対無の場所の哲学の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはないであろう。

2002年の秋からは、入会していた日本ホワイトヘッド・プロセス学会の名誉会長のM.教授の依頼で、著者は、京都駅の近くのコンソシアム京都の演習室で毎月一回夜20時から1時間半の「ホワイトヘッド読書会」を約5年間開催することになった。この読書会では、アメリカでホワイトヘッドでの博士の学位を取得され、その後もホワイトヘッド哲学を専門にされ、長い間、日本ホワイトヘッド・プロセス学会長でもあられた京都大学名誉教授の山本誠作先生に顧問をお願いした。読書会では、京都近辺の大学の諸先生や、大学生の皆さんや民間の方々、ホワイトヘッド著『過程と実在』（*Process and Reality*, 1929年）を英文で（日本語の翻訳をも参照しながら）5年間程かけて読了した。読書会ではあらゆる疑問が議論され、質問も大いに出されて、大変良い勉強になった。顧問を引き受けて下さった山本先生に、読書会員一同衷心より感謝をしている。パラダイム・シフトの時代を迎えた現代において、時代の最先端に行くホワイトヘッドや西田の哲学を学ぶ間、この年まで生き長らえてきたことは、大変有り難いことであった。

以上の出来事で重要であったことは、外国人の授業や外国人の方々との交流であった。京都大学の学生時代にも、英語の聖書学の講義やドイツ人の会話やフランス語の会話で、日本人の欠点を大いに知らしめられた。またハンブルク大学への留学、スイスでのエラノス会議、谷口財団の援助による京都禅シンポジウムにおける外国の学者との学問的交流、京都フォーラムやホワイトヘッド読書会での外国の研究者との議論等々は、日本がどれだけ学問的に

も人格的にも、また学問の総合性、国際性、学際性において狭い考え方をしているかを知らしめてくれた。

勿論、日本には良き日本文化の伝統がある。しかし、現代の日本の教育においては、世界において日本が単に経済的な優位に立とうとするあまり、文学、哲学、倫理、宗教等は影を潜め、まるでそれらを忘れ果てたかのような、単に合理性に生き抜こうとする生活が支配的である。大阪府立大学の博士課程の著者の研究室には、中国とイタリアとドイツからの留学生がいた。中国からの留学生ははや、上海で教授であり、イタリアからの留学生は日本に留まり、結婚後は二児の母親であるが、京都の外国語大学の助教授となり、その当時ドイツのニュルンベルク大学の助手であった留学生は独立の芸術家となっている。そのため、著者の研究室の学生たちは、学問的にも人格的にも大いに切磋琢磨されることができた。また逆に、中国やドイツからの留学生はその後幾度か来日し、日本の研究を真剣に深め続けている。

以上の僅かな例からだけでも、大学はいずれの国においても、世界に開かれているべきと考えられる。教員や学生は共に他国の大学との交流が可能であるべきである。さもないと、鎖国的状況で生きる国は、国際性、学際性そして総合性の学問からは外れてしまうであろう。そこで、国外の大学への留学や、その逆に外国の留学生や教員を招く場合の長所を思いつくまに纏めてみると、次のようになる。

1. 異文化との接触は諸文化への問いと反省を生み出し、創造的な仕事への情熱が高まる。
2. 他国の文化への理解が拡大し、自国の文化への理解が増進する。
3. 他国人への尊敬と他国の人々との友人関係が生活や学問をとともにすることにより増進し、人種差別が是正され、人権思想への自覚が増し、積極的な世界平和への願いが増大する。
4. 人間の自由・平等・博愛・平和への願いが自覚的に増大し、将来世代への思いが生まれてくる。
5. 単なる学問や技術の促進・発展・進展等は、地球の環境汚染や環境破壊を招きこそすれ、その平和利用への精神性や倫理性や人格性がなければ、地球の滅亡へと陥って行かざるを得ないことを知らしめてくれる。

以上は、日本から外国の大学への留学や外国の大学からの留学生や教員との出会いにより、学問や技術や人間性は、総合的、学際的、国際的でないと地球や人類の繁栄には進まず、破滅にしか陥らないことを自覚させてくれることを示している。

IV. A.N. ホワイトヘッドの教育論

ここで、A.N. ホワイトヘッドの教育論の強調点を三点に絞って述べておきたい。というのも、これこそが、自然科学のみが重視されている歪んだ現代の世界において、教育の基礎になければならない事柄と理解されるからである。

ホワイトヘッドの教育論における第一に重要なポイントは、「科学、芸術、宗教、道徳は人間存在の内にある... 諸価値⁽⁸⁾についてのセンスを含んでいます」⁽⁹⁾と語っていることである。このような考え方は、周知のように古代ギリシアの哲学者・ソクラテスやカント (Immanuel Kant, 1724-1824)、さらには西田幾多郎の哲学のうちにも見られる。つまり、人間存在のうちに存する知的欲求としてのエロス (eros、すべてを自らに奪おうとする「人間的な愛」) が、肉体的なものから順次、習慣や制度等の美へ、そして心霊上の美へ、次いで学問上の美へと向い、最終的には精神的な唯一絶対の神々しき美のアイデア、つまり美自体、美の原型に向かうという、総ての人間に存すると考えられた哲学的な衝動としてのエロスについてのソクラテスの考え方。次いで、最終的にはそれ迄優位が

置かれていた純粋に理論的な物理学や数学の領域とされていた理論理性ではなく、これを逆転させて実践理性に優位をおくカントの哲学においても最終的には美は、彼の『判断力批判』（1790年）において示されているように（普遍が悟性や純粋実践理性から働く「規定的判断力」に対して）、特殊だけが与えられている場合に普遍を見出すことによって普遍に特殊を適用する能力としての「反省的判断力」では、そこに見出される美的判断力も目的論的判断力も共に道徳的主体として「人間」や、カントでは道徳の根拠となっている自由概念に基礎づけられた「人格」とに見出される。更に西田哲学においては、総ての人間には宗教的要求が見出されており、また総ての学問は情意と同定されている「純粋経験」から説明されうると考えられているからである。

ところで、ホワイトヘッドの教育論は、ソクラテスやカントとの教育についての考え方と類似性はあるものの、後二者が主観-客観-図式で対象化・客観化・抽象化・合理化での「主語論理」で思惟を進めるが、前者のホワイトヘッドはむしろ主観化・具体化・経験重視の方向をも同時に容れて思索を進める。従って、ホワイトヘッドの「有機体の哲学」は、日本の哲学者の西田哲学に通底していると言えよう。

科学のみが重視されて、芸術、宗教、道徳が無視される世界においては、環境は破壊され、人間性は頹廢し、世界は各国間の権力や領土の争奪戦の場となり、一切の合理化の終結点は、人類の滅亡となるであろう。

ホワイトヘッドの教育論における第二に重要なポイントとしては「教育の本質とは、それが宗教的なものかどうかです」⁽¹⁰⁾ という視点を挙げたい。というのも、現代の教育には、宗教が全く無視されているからである。ホワイトヘッドにおける宗教とは、西田においてと同様に既成のある一宗教を意味していない。彼における宗教とは、同じく西田においてと同様「誠」を意味している。一切を含めた人間の生活の基礎に「誠」が据えられたならば、闘争や原発事故や核兵器に脅える個人の生活や、社会、国家、世界は、平和へと方向転換できるであろう。

ホワイトヘッドの教育論で第3に重要なポイントは、次のように語る彼の考え方である。即ち、「究極的のものを言う力は」、科学、芸術、宗教、道徳においての、「価値についてのセンス…、重要度についてのセンス…」⁽¹¹⁾ であると。

カントが語るように、教育は各人の一生涯を通じて継続して行くが、その教育の人生行路においては、各人は究極的なものを求め、究極的に語りうる力を求めて、学問や芸術や宗教や道徳に生きて行く。その時の支えとなるのが、価値についてのセンスであり、重要度についてのセンスであるというのである。この場合のセンスとしては、ホワイトヘッドは、「驚き」、「好奇心」、「畏敬の心」、「尊敬」、「自分を超越する何ものかに、自我を融合させたい」となる激しい願望等の諸形式を挙げている。彼によれば、このセンスの如何によって、積極的、冒険的にも、逆に消極的、受動的にもなるわけである。価値センスの力が最も深く浸透して現われるのは、美についてのセンスとされている。この点で、ホワイトヘッドの真理に向かった美である「真的美」を中心とした教育論は、カントの『判断力批判』の反省的判断力による道徳的主体を世界の創造の究極的目的としている点と類似していると言えよう。というのも「誠」や「道徳的主体」が中心に置かれる教育論は、合理化や対象化の方向とは逆に、真の自己や世界への反省という自覚を基礎にしているからである。

V. 今後の大学への希望事項

最後に、今後の大学への希望事項を記しておきたい。

- 1、外国の大学との学生や教職員の交換が可能で、総合的・学際的・国際的な教育が可能で、自由、平等、博愛、平和、自由思想への冒険を推進することである。
- 2、「誠」を核心とし、しかも科学、芸術、宗教、道徳を重視する、全人的教育を推進することである。

- 3、各時代や自らの時代の価値観・最重要な未解決の問題への取組みを示すことである。
- 4、社会人入試、老人大学をも含めた生涯教育にも携わる大学であって欲しい⁽¹²⁾。

注

- 1.Kant,*Werke in zehn Bänden*, Bd.10.II.Teil,1983,WBG, Darmstadt,S.699.
- 2.Vgl.Kant, *Werke*, S.706f..
- 3.カント著『永遠平和のために』、宇都宮芳明訳、岩波文庫 参照。
- 4.マルチン・ブーバーは、オーストリア生まれの、ユダヤ系の宗教哲学者・社会思想家・聖書学者・教育家で、「我と汝」という一人称と二人称の根源語からなる「対話の倫理」を提唱した。
- 5.ハンス・ヨーナスは、ドイツ生まれのユダヤ人哲学者。
- 6.ジャック・デリダは、フランス植民地時代のアルジェ近郊で、土着ユダヤ人の家庭に生まれた。
彼は、ヨーロッパのすべての机上学的徳目を脱構築しようとしたが、心を開いた対話としての正義と許しと歓待と責任との四つの徳は、残さざるを得なかったと言われている。
7. A.N. ホワイトヘッドは、イギリスのロンドン大学の数学教授の定年後、64才からアメリカのハーヴァード大学の哲学教授となり、独自の新しい有機体の哲学を提唱した。
8. ホワイトヘッドによれば、これは、自我の高い可能性で、一種の芸術的なセンスとされている。
- 9.『教育の目的』、森口兼二・橋口正夫訳、松籟社、1986年、p.60。
英文原書：Alfred Norht Whitehead, *The Aims of Education and other essays*, the Free Press, New York, 1929, p.39.
- 10.『教育の目的』、森口兼二・橋口正夫訳、松籟社、1986年、22頁。英文原書、p.14.
- 11.『教育の目的』、森口兼二・橋口正夫訳、松籟社、1986年、61頁。英文原書、p.40.
12. 例えば、ドイツでは各社会人は定年後、勤め先から大学へ戻って、老若男女が一堂に会して勉学や研究に励む。